

---

書 評

---

John Marenbon: *Early Medieval Philosophy (480-1150).  
An Introduction.*

Routledge & Kegan Paul, 1983, pp. ix+190.

金井 多津子

本書の表題に示されているように、著者は西方ラテン世界における“the early Middle Ages”を480年から1150年までととらえているが、これは、ボエティウスの生年から西方へのアリストテレス哲学の本格的流入が始まるまでの期間にあたる。著者のいう「中世初期」とは、古代哲学と12世紀後半からの中世哲学の発展との狭間にあって、哲学史の叙述においては、カロリングルネサンスの一時期を除いて、従来顧られることの少なかった時代である。本書は、その間隙を埋めようとする試みの一つだといえよう。

著者は、前著 *From the Circle of Alcuin to the School of Auxerre* (1981) (同書の書評を、筆者は本誌第 XXIV 号において試みた) において、論理学と神学との fusion という観点からカロリングルネサンスとそれに続く時代を論じているが、本書においても、著者のいう「中世初期」の思想状況を論理学とのかかわりに注目してとらえようとしている。というのも、「中世初期」において古代哲学の伝統に属するどのような著作が読まれえたかをみても、ボエティウスによるアリストテレスの *Categoriae* と *De interpretatione* の訳と注解、ポルフェリオスの *Isagoge* の訳と注解が最も重要な位置を占めているのであって、著者は、これら論理学的著作に含意された形而上学の問題が中世初期の哲学の方向を決定したとみなしているからである。そして、こ

のことから、著者は、「中世初期」の哲学上の主題と方法に何らかの連続性があったと考えているのである。

さらに著者は、「中世初期」が哲学史の叙述において言及されることの少い理由として、この時代にはまとまった哲学上の著作がなく、哲学の意義が論理学や神学の一部としてしか認められていないことを挙げている。しかし、著者によれば、そこにかえてこの時期の特色があるのであって、著者は、個別の著作のみならず、テキストの欄外に付された glossae にまで立ち入ることによって、それに迫ろうとしている。こうした方法は、「中世初期」の思想状況を論ずるにあたって、先にふれた前著にも共通にみられるものであって、著者の観点の一つの特色を示すものだといえよう。

本書は、Part 1: The antique heritage, Part 2: The beginnings of medieval philosophy, Part 3: 1100—50 の三部からなるが、上述の方法が駆使されているのは、特に第2部においてである。第1部の最終章において古代から中世への架橋としてのポエティウスについて論じられ、第2部は、テオドリックの宮廷におけるポエティウスの後継者カシオドルスから始められている。それ以後、インドルス等は挙げられるにせよ、著者もいうように、傑出した思想家は必ずしも出てはいない。だが、アイルランド修道士の活動と共に、イングランドにはヨークを中心として、ベーダ、エグバート、アルクィヌスに至る知的土壌が形成され、大陸におけるカロリングルネサンスがそこから育った人々によって開花し、以後 Johannes Scottus Eriugena, Martinus Scottus (Martin of Laon), Sedulius Scottus 等、Scottus という異名を冠せられる人物が輩出したという興味ある事実を、著者は指摘するのである。

著者は、アルクィヌスを、インドルス以後論理学に関心をもった最初の人物として評価し、彼を中心とするサークルにおいてなされた議論を反映すると考えられる資料（前著においては Munich Passages として詳細に検討されていた）を取り上げる。例えば、そこにみられる *ousia* を神のみに適合させようとする試み、神と時間・空間との関係についての叙述から、著者は、カテゴリーとそれにかかわる諸概念、ならびに論理学の初歩的テクニクの神学への適用を読み取り、こうした神学への論理的アプローチは、以後12世紀に至るまで一貫した傾向だとみなすのである。

このようなとらえ方は、カロリングルネサンスの後期に位置するヨハネス・スコトゥス・エリウゲナに関する叙述においても示されている。著者によれば、エリウゲナは、

論理学上の類・種の階層を自己の形而上学的体系のうちに組み込み、神への還帰を個物→種→類→ *genus generalissimum* という図示においてとらえようとする。そして、エリウゲナは、一方で *ousia*=個物という立場を認めながら、同時に *ousia*=*genus generalissimum* を提唱し、著者のいう *hyper-realism* の道をとることになったというのである。著者は、エリウゲナのこうした見解に論理学と神学との *fusion* を認め、そこに「中世初期」の思想家の一つの典型を見ようとしているのである。

哲学史におけるエリウゲナの位置づけに関し、彼の業績が同時代の人々からほとんど無視され、ようやく12世紀になって顧られるようになったという従来の見解に対し、著者は、*Periphyseon* の多数の写本の存在、*florilegium* への抜粋等から、エリウゲナの思想は明らかに同時代の人々に影響を及ぼしていると推測し、前著においては、エリウゲのサークルというべきものの存在すら提唱している。その証左として、特に当時論理学の教科書として最もよく用いられた *Categoriae Decem* に付された *glossae* に、1) *ousia* と普遍、2) すべてのものの神への還帰、3) 論理的発想の神学への適用という点において、エリウゲナからの引用が目立つことを、著者は挙げているのである。

また、著者によれば、*glossae* は、一般に“the Dark Age”といわれる10、11世紀の思想状況の情報源としても重要な意義をもち、テキストの写本自体の系統とは別に、*glossae* の系統を辿ることができる。また、著者は、そこには、異教の哲学ならびにそれとキリスト教との関係に対する関心 (*De consolatione philosophiae*, III, metrum 9 に対する *glossae*)、ポエティウスにより神学に導入された形而上学的発想への関心 (*Opuscula sacra* に対する *glossae*)、ならびに論理学の理論の神学への同化の過程 (*Categoriae Decem* に対する *glossae*) が示されているという。さらに、9・10世紀における論理学上のテクニクの増大を示すものとして、著者はザンクト・ガレンの修道院における著作活動に言及し、そこに、神学的議論を明らかにするために論理学のテクニクを用いるという傾向を読み取っている。著者の指摘するところでは、こうしたことが、論理と言葉との関係に対する認識、ならびに *dialectica* に対する関心を喚起し、11世紀における *grammatica* の発展の先ぶれとなるのであって、10世紀にはたしかに独創的な思想家は見い出されないが、この世紀における特に形式論理学の発展が11世紀における神学的、哲学的議論に影響を及ぼした点に、著者は、この世紀の知的意義を認めているのである。

10・11世紀における古代哲学の伝統とのかかわりに関し、例えば *De consolatione philosophiae* に対する glossae についていえば、先にもふれたように、*Timaeus* の要約とでもいうべき III, metrum 9 に集中的に glossae が付され、それらのうちには、ポエティウスの異教の見解に対する非難と、ネオプラトニズムの比喻を、それとキリスト教との矛盾点を無視し、キリスト教に適合させようとする態度という相反する傾向がみられる。著者によれば、これは、古代哲学の伝統をキリスト教へと摂取する際の困難さを反映し、またこの問題は、11世紀における anti-dialectica の動きともかかわることになる。

一般的な見解によれば、anti-dialectica の議論は、信仰と理性の問題とのかかわり、異教の哲学に対する反発、そこから神学を引き離そうとする傾向と軌を一にするものであって、anti-dialectica の立場に与する者は異教の学問全体に敵対しているとされている。しかし、著者はこうした見方に異議を唱える。著者は、異教の学問批判ならびに anti-dialectica の急先鋒とされるペトルス・ダミアンの *De divina omnipotentia* にふれ、それが、神学に対する論理学の適用を全面的に非難するものではなく、全能の神について語るにあたって人間の理性がどこまで有効かを検証するものであり、そこには、論理学のテクニクの濫用には反対しているとはいえ、その適用範囲を限定した上で思考の道具として用いようとする傾向もみられることを指摘する。ダミアンは純粹に言葉だけにかかわる学科として dialectica を規定するが、これは当時増大しつつあった言葉と論理学との関係についての関心を反映するものであって、anti-dialectica の議論を中心とする11世紀における論理学と神学とのかかわりは、このように論理学の本質についての反省がなされたという点で、9世紀におけるのと同様に生産的であったとされているのである。しかも11世紀には、9世紀以来、哲学的関心からは取り上げられることのなかったプリスキアヌスの *Institutiones grammaticae* に対し、再び注解がなされるようになり、こうした状況が、第3部において言及されることになる12世紀前半における神学、dialectica、grammatica 相互の活発な交流の土台となった、と著者はみなしている。その端的な現われとして、著者は、アベラルドゥスの論理的著作に言及し、普遍をいかに理解するか、「言葉」と「もの」とのかかわりをどうとらえるかという点において、論理学を基礎とする哲学的思考が明らかに示されている、と述べているのである。

本書において、著者は、西方ラテン世界における「中世初期」の思想状況を、上述のように論理学と神学とのかかわりにおいて思考が展開された時代としてとらえ、傑出した思想家はわずかだとはいえ、看過してはならない時代とみなしている。とりわけ、前著に続き、glossaeに注目し「中世初期」の思想的空白を埋めようとする本書の試みは、他にあまり例がないだけに有意義なものといえよう。本書の末尾に付されている典拠資料の文献表は、(1) Firmly attributed works, (2) Anonymous works (i. Treatises with titles, ii. Untitled treatises, iii. Glosses and commentaries) に区分され、各著作について、英訳の有無、写本もしくは印刷刊本のどこを参照すればよいかが表示された便利なものであり、これがまた本書の特色ともなっているのである。

---

International Anselm Committee (ed.):

*Anselm Studies, vol. 1*

Kraus International Publications,

Millwood, New York 1983,

pp. viii+273.

山 崎 裕 子

アンセルムス研究誌として、*Analecta Anselmiana* が5巻まで刊行されていたが (Minerva GMBH, Frankfurt/Main 1969—76)、それを引き継ぐ形で *Anselm Studies* 第1巻が出版された。本書は、国際アンセルムス委員会の主催した第3回国際アンセルムス学会 (1979年7月2—5日、於カンタベリ) を契機として立案されたもので、同学会での M. Ramsey カンタベリ大司教の講演「ベック並びにカンタベリのアンセルムス」のほか7部に分かれ、英独仏伊語による18篇の論文とテキスト1篇が収められている。これは、同学会で発表されたものの3分の1強に当たるが、発表論文以外のものも含まれている。

構成は、次の通りである。